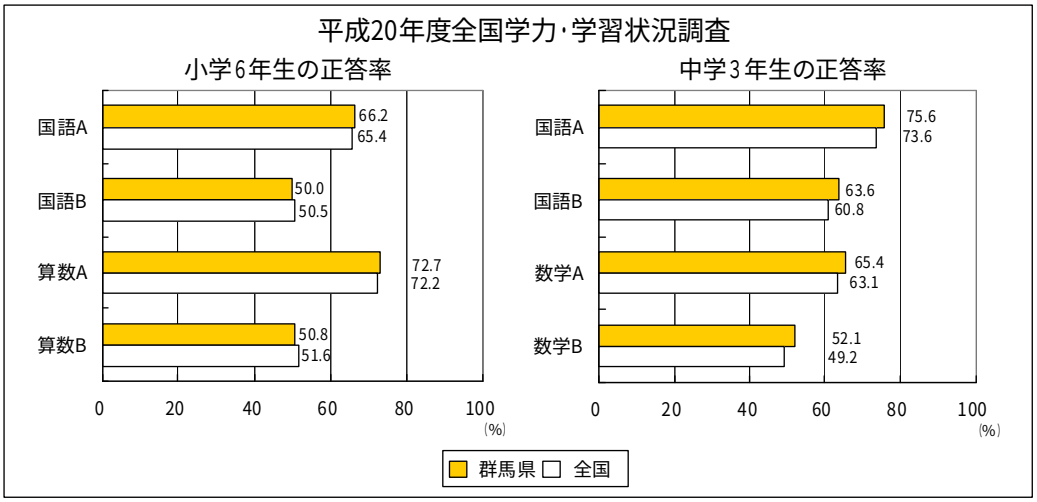
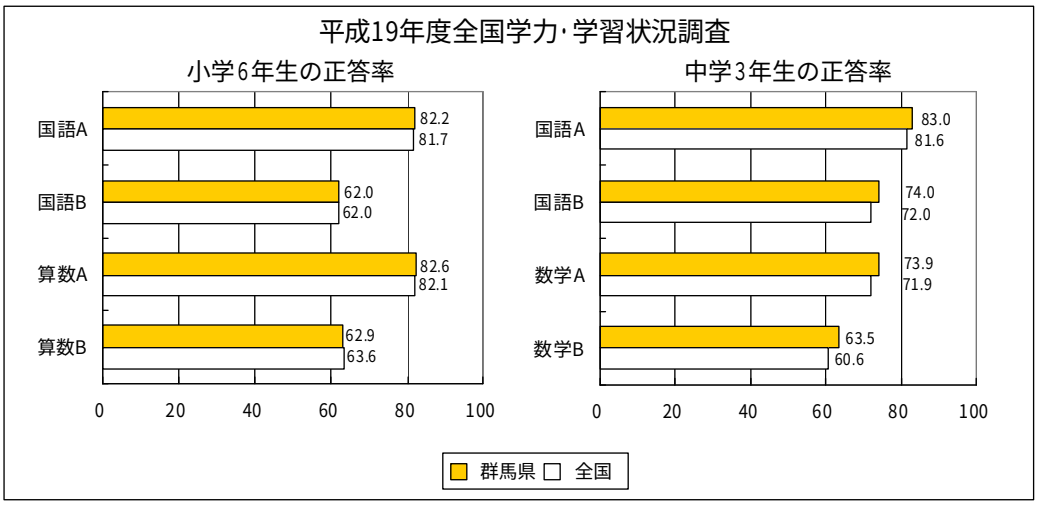
取組１	基礎・基本の確実な習得

○ 現状

文部科学省が実施した全国学力･学習状況調査の本県の結果は、以下のとおりです。





※　・国語Ａ、算数Ａ・数学Ａ：主として「知識」に関する問題
　　・国語Ｂ、算数Ｂ・数学Ｂ：主として「活用」に関する問題

教科別に特に正答率の低い問題に着目して調査結果を分析したところ、以下のような傾向が見られました。

① 数や量、言葉の使い方などが実感をもって理解されていないことが原因でのつまずきが見られる。
（事例：小学校の算数で、面積が約150cm²であるものを身の回りの具体物（切手、はがき、教科書、教室の床）から選択する問題の正答率が16.6%）

② 日常生活での様々な体験の不足が原因でのつまずきが見られる。
（事例：中学校の国語で、二つの宅配便の伝票の書き方を比べて、見やすさのポイントを正しく指摘する問題の正答率が50.9%）

③ 与えられた問題文や資料を的確に読み取る力の不足が見られる。
（事例：小学校の国語で、提示された「図書館だより」の中から、６年生の読書相談が可能な曜日と時間帯を正しく読み取る問題の正答率が36.0%）

④ これまでに学習している内容の理解が不十分なため、それらを活用する問題でのつまずきが見られる。
（事例：中学校の数学で、２年生の「関数」で学習した変化の割合や一次関数の式を使って、上腕骨の長さの差から身長の差を導き出す問題の正答率が50.4%）

○ 課題

・実験や観察、操作的活動など、実感を伴う学習が十分でないため、学習内容が確実に身に付いていないこと
・日常生活での体験の不足の影響で、学習内容が確実に身に付いていないこと
・問題文の内容を正確に読み取ったり、必要な情報を的確に選択したりする力が不足していること
・学習した内容を様々な場面で活用する力の不足が原因で、応用的な問題や発展的な問題を解決できないこと

○ 取組の方向

・つまずきやすい内容を確実に習得するための基本練習や繰り返し学習を徹底します。
・具体的な場面設定の中で、自分の考えを表現したり問題を解決したりするなどの学習活動を行います。
・一人ひとりの児童生徒の学習・活動履歴を記録し、効果的な指導が行えるようなモデルをつくります。

○ 主な事業の概要

事業の概要	担当部署
・全国学力・学習状況調査の結果分析の活用 文部科学省が実施する全国学力・学習状況調査の結果分析に基づき、各学校に授業改善のための具体的な資料提供等を行います。	義務教育課
・保育所・幼稚園・小学校・中学校間連携事業 一人ひとりの子どもの学習・活動履歴の継続的な記録を活用した指導の実践的研究を行います。	義務教育課
・ＰＩＳＡ型学力の育成を意識した研究 ＯＥＣＤが世界各国の 15 歳を対象に実施する学力到達度調査の結果を踏まえ、「思考力・判断力・表現力」などの能力の育成を図る授業や体験活動等の在り方について実践的研究を行います。	総合教育センター

○ 達成目標

目標の概要	基準年度の状況 （Ｈ２０）	目標年度の状況 （Ｈ２５）
・「授業がわかる」と考えている小中学生の割合	（小６）82% （中３）64%	すべての児童生徒が「授業がわかる」
・全国学力・学習状況調査（文部科学省）において正答率が６０％以下であった設問数の割合	（小６）国語 53 % 算数 41 % （中３）国語 25 % 数学 39 %	繰り返し学習の徹底等による誤答や無解答の減少

全国学力･学習状況調査

全国の小学校第６学年、中学校第３学年の児童生徒を対象に、文部科学省が実施する学力・学習状況の調査です。児童生徒の学力・学習状況をきめ細かく把握・分析することにより、教育及び教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ります。

学力調査では国語、算数（数学）について、それぞれ、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を出題し、学習状況調査では生活習慣や学習環境等に関する質問を行っています。